

論文審査及び最終試験結果報告書

課 程 博 士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座		
学 籍 番 号	18GR102	氏 名	金 崎 惣 一
審 査 委 員 (自署又は記名押印)	主 査	今 田 匡 彦	印
	副 査	杉 山 祐 子	印
	副 査	山 田 巖 子	印
<p>(論文題目)</p> <p>音楽教育における〈図形楽譜としてのソノグラフィ〉：音環境と音楽表現を取り結ぶ記譜法として</p>			
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>明治期に西洋から移入された「音楽」は、長調/短調を基盤とするダイアトニックで構成されている。唱歌教育を源流とする日本の音楽教育は、このダイアトニックによる「西洋音楽」の表記法である五線譜による記譜を基盤として今日まで展開されている。しかし1980年以降に音楽教育研究の領域から提唱された所謂「創造的音楽学習」の提唱者たちは、従来の楽譜では自然音、生活音、環境音など新しい音の要素には対応出来ない、と指摘する。サウンドスケープ思想の提唱者 R.マリー・シェーフアーによる新たな音楽教育実践は、この視座において極めて重要な役割を果たす。以上を踏まえ本論文は、西洋及び日本における記譜の歴史を、文献調査により明らかにするとともに、20世紀の実験音楽の文脈で提唱された図形楽譜の音楽教育での有効性について明らかにした。また、シェーフアーが提唱したサウンドスケープ研究における記譜法「ソノグラフィ」を音の記述的表記と捉え、明治以後の音楽教育で使用されてきた五線譜を中心とする規範的表記との比較分析を行うとともに、図形楽譜とソノグラフィの融合による新たな音楽教育実践の可能性について論証した。本論文では更に、図形楽譜としてソノグラフィを用いた音楽教育プログラムを、学校現場、及び地域でのワークショップの実践から検証した。論文審査に当たっては、適格な先行研究により論文の研究背景、文脈が示されているか、研究背景から明確な research question(s)が示されているか、research questions(s)に応えるための適切な方法論が取られているか、方法論に沿った適切な手順による分析、検討が行われているか、research question(s)に対応する結論は導き出されているか、について確認した。</p> <p>音楽教育におけるこれまでの楽譜、サウンドスケープによる新たな記譜、西洋音楽による記譜の変遷、そのアンチテーゼとしての図形楽譜、図形楽譜の音楽教育への援用、日本に於ける西洋音楽の移入とその弊害、シェーフアーによるサウンド・エデュケーションと図形楽譜としてのソノグラフィ、図形楽譜による子どもたちの実践、教師へのインタビュー、地域での実践とその分析といったそれぞれの Chapter から明確な findings が示されるとともに、これらのピースが最終的に大きなピクチャーとなり、有益な研究成果として示された。</p>			
<p>(最終試験結果の要旨) 最終試験実施日：令和4年2月1日</p> <p>今田、杉山、山田の3名で口頭試問を行った。審査員から論文の目的と結論が明確であり、詳細な文献調査による分析方法も高く評価された。第3章ではKH Coderによる計量テキスト分析が評価されると同時に、そこから取りこぼされるエスノグラフィカルな情報にも言及する必要がある点、学校から地域に広がるソノグラフィによる図形楽譜の可能性のより積極的な記述にする必要がある点が指摘された。総合的な審査結果として、本論文は適切な文献調査、学校及び地域への観察調査、地域社会に貢献する新たな音楽教育プログラムの提唱がすべて適格に網羅された労作であり、主査、副査全員一致で博士論文に相応しい内容であるとの結論に至った。審査結果：合格</p>			